

己を見るごとに、必ず、はせきたりて、袖に、すがりぬ。

幼児ながらも、温心、掬するに、あまりあり。か

かる兒の母たる人、師たらん人は、いかに、楽しく、

いかに、うれしからむ。

あはれ、この姿、このころ、正しき自然に従ひて、

ゆく／＼教へ導かれなば、生長の後には、いかに、め

でたき實を結ぶらむ。



母と子のをしへといへる文のはしにしろす

べき歌をと清水君のこひたまへるに

中島歌子

うつくしくまなひの庭に陰にけり

母のをしへのなてしこのはな

風前雪

竹屋つね子

村からす寝くらにかへるこえ絶て

ふゝきにくるゝ遠のひとひら

鳥 庭田長子

おそろしき爪もつわしも子を思ふ

こゝろの闇になきあかすらん

催 雪 中村禮云

雨になりみそれになりて昨日今日

くもるや雪のしるしなるらん

遠樹紅 田中みの子

むらからす寝にゆく岡の森かけに

のこる夕日はもみちなりけり

竹間霰 箕作光子

むらすゝめねくらさためし竹村に

こゝろなくふる玉あられかな

雪中遠情 磯部つや子

所せきにはもけしきをそへてけり

ゆきみまほしき松かうらしま

山家冬來

木原庫子

さくら花かへりさきして山さどの

かきねのどけき冬はきにけり

母の心をよめる

清水鶴子

そへちしてねふるわか子の夢にたに

あしき事をはみせしどを思ふ

稚兒(唱歌)

東 象 子

玉よりとふとし

稚兒のこゝろ

花よりうるはし

ちどのすがた

くもるも光るも

ちゝのをしへ

馨るもかるゝも

はゝのなさけ

四季によせて

同 人

春花のあまひを見せてをさな子か

うちゑひ様のうるはしきかな

うきよしもなくして生ひ行く竹の子の

千代のさかえぞ見ゆるこの園

紅葉とも見ゆる手に手を携へて

あきの山邊にゐそぶさどの子

ちりの世に立ちまじりても白雪の

清きそちこのこゝろなりける

折にふれて

同 人

うくひすの初音ゆかしきこゑくに

花さくはるをうたふをさな子

